

はしがき

世界と日本の現代政治を考えると、むしろ多様なアプローチの方法が想定しうるが、ここでは執筆者の専攻する政治思想史（日本と西洋）や政治史の視点を生かし、この視点から現代政治を読み解き、考える素材が提供できればという意図の下に本書を編集した。本書のタイトルを『歴史・思想からみた現代政治』とした所以である。

その際、各執筆者が単一のキーワードを選択し、そこから現代政治のある側面をながめてみる手法を考え、新自由主義、愛国心、移民、民主主義、福祉、国家と軍隊、歴史認識、アジアといった八つのキーワードを取り上げた。これまでキーワードで政治思想史を解説する著作はいくつか出版されているが、本書はあくまでも現代政治の一断面を切り取ることに焦点を合わせている。この意味では、最近出版された『姜尚中の政治学入門』（集英社新書、二〇〇六年）で採用されている趣向に近いが、それでも本書はどちらかといえば日本政治思想史や日本政治史の観点から近現代日本の歴史的体験に多くの題材を求めているところに主たる特徴があるといえよう。

さて、本書では八つのキーワードを扱った各章を三つの枠組みの下に編成したが、以下で簡単にその要旨を紹介しておきたい。

第Ⅰ部「グローバリゼーションと国民」の下に、「新自由主義——市場原理主義と国家の変容」（第Ⅰ章）、「愛国心——知的伝統の再発見」（第Ⅱ章）、「移民——近代日本の経験と現在」

(第3章)をまとめている。周知のように、世界的に人・モノ・資本・情報などが活発に移動するグローバル化の進展のなかで、一方でボーダレス化の広がりとともに国民国家の揺らぎが叫ばれながらも、他方でヘゲモニー国家の地位の奪い合いやそれに必要なナショナル・アイデンティティの再編が同時に進められているが、新自由主義、愛国心、移民というキーワードはその状況を読み解くにあたって中核的な位置を占めるといつても過言ではなからう。

第1章は、グローバル化の推進力の役割を担う新自由主義が大きく広がり始めた結果、われわれの生の境位にいかなる変容が生じているかを明らかにしている。市場競争原理を採用する新自由主義の発想は、市場社会の自律性を信頼する古典的自由主義への回帰ではなく、実は国家機能の再編をともなう「強い国家」を志向していることが意外と見失われやすい。その意味では、新自由主義は「道徳」と「秩序」の再生をめざす新保守主義(ネオ・コン)の思想と表裏一体であり、日本でも小泉政権の新自由主義と安倍政権の新保守主義が相互補完の関係にあることは明白である。

第2章は、西洋パトリオティズムの知的伝統とその日本への受容に関する歴史的分析に照明をあてている。というのも愛国心を自然な性情として無条件に賛美する人々と、過去にもたらした愛国心の歴史的罪悪のために毛嫌いする人々との間に、不毛の対立が生まれている状況の下では、愛国心そのものを冷静に理性的に認識することがますます重要になると考えられるからである。そして近現代日本の愛国心論の歴史的展開のなかに見出される西洋パトリオティズムの知的伝統の再発見を通して、愛国心をめぐる国内外での対立・抗争を克服しうる開かれた愛国心論の構築を展望している。

第3章は、近現代日本の体験を題材にして、アメリカやブラジルに渡る日本からの移民(emigrant)と、「在日コリアン」などの日本への移民(immigrant)を分析したものである。彼らの選択が「夢」を託したものであっても、強制であればなおさら、彼らに待っていたのは厳しい差別と迫害の「現実」であった。こうした「夢」と「現実」を改めて振り返ってみることは、現代の「移民社会」の広がりの下では不可欠な知的作業であり、貴重な教訓を与えてくれるであろう。

第I部「民主政と国民」の下に、「民主主義——夢と現実」(第4章)、「福祉——社会的排除と国民統合」(第5章)、「国家と軍隊——文民統制の変遷」(第6章)をまとめた。ここでは民主主義の思想原理だけでなく、個人の幸福追求の視点からの福祉の充実や軍隊に対する文民統制という考えに示された民主主義の制度化構想を歴史的にフォローすることによって、近代国民国家における民主主義の成熟をいかにすれば高めることが可能かを探求している。

第4章は、一方で、民主主義のルーツである古代ギリシアにまでさかのぼり、そして近代以降のヨーロッパにおいて民主主義が息を吹き返してから、第一次世界大戦前後の時期に大きく変貌を遂げ、現代の自由民主主義体制が承認されるまでの歴史を概観する。他方で、日本では民主主義がどのように受容されてきたのか、明治期の福沢諭吉や自由民権運動を取り上げ、最後に大正期における吉野作造の民本主義について検討している。現代の日本でははたして民主主義は成熟しているといえるか、過去の追体験を通して考える素材を提供している。

第5章は、社会福祉をめぐる国家の介入の拡大と個人の自主性の緊張関係、欧米の福祉政策や福祉実践の紹介、社会的弱者に対する差別と包摂などを歴史・思想の視点から考察している。

とくに前近代日本の仏教・儒教思想に見出される、福祉を憐れみからの施しとみる視点から、明治維新以後それを国民から請求する権利とみなす視点へと大きく進歩する過程を明らかにするなかで、この日本の長い歴史において培われた「社会的情誼」の復活を提唱している。

第6章は、軍隊が国家建設および国民形成に果たす役割を主として戦前日本の帝国軍隊を題材にして検討している。日本の軍隊は国家的独立を担保し、国民統合における模範的な国民を育成する場となったが、やがて政治に深く介入することで国とともに自らをも崩壊させた。こうした問題を文民統制（シビリアン・コントロール）の視点から分析し、事実上の軍隊である戦後の自衛隊と文民統制との関連にまで言及している。

第Ⅲ部「ネーションを超えて」の下に、「歴史認識——過去の記憶と政治の論理」（第7章）、「アジア——対立と共同のはざま」（第8章）をまとめている。ここで「ネーションを超えて」と表明しているのは、もちろん国民国家の解体を希望しているからでなく、ネーションの枠組みに拘束されるもの考え方からいかにすれば脱却できるか、いわばトランスナショナルな視点の構築可能性を考えてみたいからである。

第7章は、ドイツと日本の事例を比較検討しながら、ナショナル・ヒストリーの危険な側面を相対化するためのパスpekティブのあり方を探求している。近代になると、歴史は国民国家を形成する重要なファクターとして作用し、その政治的役割は飛躍的に拡大するようになる。ドイツや日本の事例からも分かるように、国民国家の歴史すなわちナショナル・ヒストリーは国民のナショナル・アイデンティティを形成するための中核をなし、しかもエスノセントリズムな言説を下支えすることになった。その結果、ナショナル・ヒストリーをどう理解するかと

いう問題が歴史認識の問題として政治的対立の発火点となり、かかる対立をさらに深刻化させる危険因子として作用するようになってしまったのである。その構図は、ポスト国民国家の時代と呼ばれる現代にあっても基本的に変わりがない。

第8章は、近現代日本の「アジア」観を読み解き、今後の日本と「アジア」の良好な関係や東アジア共同体の構築という将来展望を考える素材を提供している。具体的には、明治時代における「脱亜論」と「アジア主義」の展開、「アジア」における革命運動・独立運動に対する日本人の視線、大正デモクラシーの思想家にみられる「アジア」へのまなざし、日中戦争・太平洋戦争期において展開された「アジア」提携の論理、そして戦後日本人の「アジア」認識の諸相などを取り上げ、近代以降の日本の知識人がいかに「アジア」という存在に向き合ったのかを分析した。

最後に読みやすさを考慮して、引用文の難しい漢字にはルビをふり、適宜に句読点を付したことをお断りしておきたい。

二〇〇八年五月

出原政雄